

### 第三百二話 暗号敗戦！

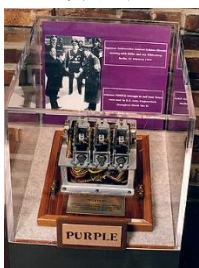
機密のベールに包まれた「暗号戦」、巷間日本は情報戦就中暗号戦で負けたと云われる。その概要を概述したい。日米の情報・防諜に対する認識の差、日本の陸・海軍及び外務省等の組織でもその差異が顕著である。それが日本敗戦に直結したかもしれない。

#### 1 外務省が使用した暗号

外務省は、暗号機B型（米コードネーム：パープル暗号）を1939年から終戦まで海外主要公館で使用していた。海軍の九七式印字機と同一のもの。1941年初に米陸軍は模造機を完成し、解読に成功（ソ連も同年秋には成功）した。尚、1939年には句読点コードがニューヨーク総領事館から盗写された。

解読された情報は、マジック（Magic）情報として政府高官の一部に配布された。

外務省暗号事案としては、日本の対米通告電報の解読と大統領等への報告（1941/12/8）、大島駐独大使からの漏洩疑念報告（1941/4月）、フランス戦線視察報告の解読によりノルマンディ上陸に貢献（1943/11月）、参謀本部釜賀少佐の九七式の危険性判断（1944秋）等々



#### 2 海軍が使用した暗号

海軍は1939/6/1、戦略常務用暗号として通称「D暗号」と呼ばれる海軍暗号書Dの使用を開始し、これは暗号通信の約半分を占めるほど使用頻度の高いものとなった。このD暗号は「海軍暗号書D（暗号本体）」「乱数表」「使用規定」「特定地点略語表」「暦日換字表」などから構成されており、原則的に1単語を5桁数字で表す構造だった。確かに世界的にD暗号は強度が高く、海軍はD暗号の秘密保持性を過信してしまった。故に、暗号本体の構造を変更することなく、乱数表などを逐次更新しての使用が続けられた。尚、アメリカ側はD暗号を「JN-25（JNは「Japanese Navy」の略）」と称し、日本海軍の暗号なのでその解読作業は同じ海軍で行うことになり、徹底的に解読作業を進めた。

暗号に関わる不祥事としては、MI海戦（暗号解読されての待ち伏せで連合艦隊惨敗、1942/6/5）、海軍甲事件（山本大将待ち伏せ撃墜事件、1943/4/18）、海軍乙事件（古賀連合艦隊司令長官事件で数々の暗号書等を含む多数の重要機密が奪われた事件、1944/3/31）等がある。（120話参照）また、豪州で撃沈（1941/1月）された潜水艦伊124号から米豪軍が暗号書等を回収したとも言われるが定説となっていない由。

D暗号が開戦直前に解読されていたか否かは、最終的結論は出ていないとされるが、断片的とする見解と相当量解読していたとする見解がある。MI海戦前では、暗号書D改訂版も30%程度は復元されていたとの推定もある。

#### 3 陸軍の暗号

海軍とは仕様が異なる九七式、その改良型を使用していた。組織レベルに応じた各種暗号を使用していたのは言うまでもない。通説では陸軍暗号は最強、安泰だったと云われている。終戦後に陸軍暗号は解読できなかったとの米軍関係者の発言、無限乱数表を使用していたこと等からそう云われた。然し、近年それに対する反論も出てきた。

冷静に考えれば、陸軍の暗号も完璧ではなかっただろうとは思えるが、外務省や海軍に比すれば相当なレベルにあったのは事実だろう。

#### 4 陸・海・外で差異のある解読率

暗号の重要性に関する国家としての認識不足、外・海・陸の防諜に対する意識の差異、それによる人的物的資源投入の差異等がある。米国の努力に比べれば日本は何とも悲しい位だ。日本人の情報に関する感性の無さの証明か。

（了）